

サッカーの技術・戦術の検討

—アラン・ウエイドを中心として—

高橋正紀

1. はじめに

日本サッカーの低迷が叫ばれて久しい。各種のサッカー関係の出版物においては、「メキシコ五輪以来…」というフレーズが使い古されてしまっている。先ごろ行われたワールドカップ・アジア地区第一次予選においても、日本代表チームは北朝鮮に完敗を喫し、二次予選進出の道を断たれた。

アジア予選を前に、日本サッカーの強化のために来日したデットマール・クラマー氏¹⁾に言わせれば「はっきり言っている代表チームには技術も戦術もない。」²⁾のである。このような現状は、「基礎技術不足」であるとか「戦術的理解に劣る」とかというような形で日本国内においても一応の認識はされているが、世界のトップクラスのコーチにこうもはっきりと言い切られてしまうとはいささかショックなことである。

国内の実際の状況としては、メキシコ五輪における銅メダル獲得以後、サッカーは急速に日本国内へと普及し、近年もその勢いは衰えずじつに1979年度より1987年度のあいだにそのサッカー人口を27万3887名から66万9419名へと2.5倍に増やしているのである³⁾。このような状況のもとで、サッカー選手個々の技術レベルは確実に向上していると言ってよい。しかしながら、国際舞台での日本代表チームの現実はというと上述したような有様なのである。こういった現状の原因としては、組織の問題を始めとして考えら

れる問題点は多々あるが、そのなかの一つとして挙げられる基本的な問題点は、「日本の指導者は良い練習のメニューを選手に与えているが、それをコーチしていない。」というクラマーの指摘によって現されていると言える。

このことは何を意味しているかという点、それは指導者の技術・戦術の基本的な部分に対する認識の不足である。サッカーの技術・戦術の基本的な部分がわからないために、諸外国（サッカー先進国）の良い練習メニューを与えることはできても、それを実際に指導できないのである。

では何故認識が不足するのか。考えられる一つの理由は、エリック・パットの指摘⁴⁾にもあるように世界最高レベル（プロフェッショナル・レベル）のゲームを観戦する機会の貧弱さである⁵⁾。しかし、この事実に関しては実際問題として対応に限界がある。そして、もう一つの理由は、技術・戦術に対する基本的な研究の不足である。サッカーの技術・戦術に関する国外の専門書は、数多く日本国内において翻訳されている。しかしそれらの専門書に対する研究というのは公のレベルでは全くされていない⁶⁾。つまり、深い認識に達するための基本的な作業がなされていないのである。

そこで、本研究は、サッカーの技術・戦術の基本的な考え方に対して検討を加えることを目的とする。方法は文献研究である。対象となる書は我が国で翻訳されている技術・戦術の専門書のなかより、サッカーの母国イングランドでその優秀さが広く認められている Allen Wade の「THE FA GUIDE TO TRAINING AND COACHING」（浅見俊雄訳『イングランド・サッカー教程』ベースボール・マガジン社）を中心とする。

2. 戦術論一般

まずは、技術¹⁾・戦術やシステムに対する一般的な考え方について明らかにしてみることとする。

2・1. 技術・戦術

技術と戦術はいったいどのような関わりをもって捉えられているかについては、以下のようにまとめることができる。

チャナディは「技術は単独に存在しうるが、戦術は技術と切り離しては考えられない。」²⁾と言い、さらに「戦術は技術の裏付けがなければならず、技術水準を越えた戦術は無に等しい。」³⁾と述べている。また、アラン・ウエイドも「すべての戦術的な考え方は個々の選手の技術によって決まるのである。」⁴⁾と述べている。

これらの見解から、戦術と技術の密接なつながり、特に戦術の前提条件としての技術の位置付けがわかる。このように位置付けられる技術は、重要性という点においても戦術を上回る必要性が認められている⁵⁾。

このような技術と戦術の関連のなかにおいて、戦術それ自体はどのように考えられているのかという点、それは「与えられた試合条件のもとで最大の効果が発揮できるように、いかにプレーを計画的に、そして合理的に行うかを指示するもの」⁶⁾であるとされている。これより、合理性・計画性に基づくチーム力の効率的な使用ということが、戦術の主目的であると言えるだろう。また、戦術は個人に内在してしまう技術とは異なって純粋に記述可能なものとしてある。そのため、知的理解力が実戦の経験と並ぶものとしてその重要性を認められている⁷⁾。

2・2. システム

サッカーにおいてシステムとは、プレー・エリアにおける隊形のとり方のことであり、チーム・フォーメーションと同義で取り扱われている⁸⁾。つまり、システムとは単なる形式であって、「さまざまな戦術の応用に無限の可能性を与える一つのワクにすぎない」⁹⁾のである。しかしながら、システムはそれが数によって表現可能なもの（4-2-4, 4-3-3, 4-4-2 etc.）であるという理由から人々の注意を惹くものとなり、ワールドカップ優勝チームの採った

システムは万能のものと考えられ流行にすらなってしまう¹⁰⁾。しかし、実際には「一つのワク」にすぎないのであるから、ゲームのプレイイングにおいては同一のシステムをとっていても、その採用する戦術によって全く異なった「守備—攻撃」となって現れてくると考えなければならないのである。

3. 戦術の検討

ここでは、戦術をまず攻撃戦術と守備戦術とに分けて捉え、その上でそれぞれの戦術を検討していく。

検討を進めるに当たって、中心となるアラン・ウエイドの戦術論の骨子を示すと以下のようになる。

1. 攻撃戦術

(1) 総論部 (1. チームプレーの基本, 訳書 3—48 頁)

- ① 攻撃の厚み
- ② 守備ラインの突破
- ③ 幅広い攻撃
- ④ 攻撃の活動性
- ⑤ 臨機応変の攻撃

(2) システム論部 (2. プレーのシステム, 訳書 49—82 頁)

- ① WM フォーメーション
- ② 深いセンターフォワード
- ③ 4-2-4 システム
- ④ 1-4-1-4 システム
- ⑤ 4-3-3 システム
- ⑥ くさび型フォーメーション
- ⑦ スライディング・ディフェンス (ボルト・システム)

(3) 各論部 (3. 新しい戦術の発展, 訳書 83—134 頁)

- ① ボールへ寄る動き
- ② 組み立てのプレー
- ③ ボールのキープ
- ④ 横パス

- ⑤ 斜めへの走り込み
- ⑥ ボールから離れる動き
- ⑦ ブラインドサイドのプレー
- ⑧ 交差する動き
- ⑨ オーバーラップの動きと後方からの走り込み
- ⑩ 逆をつくパス
- ⑪ 試合のペースを変える
- ⑫ 足もとへの正確なパス
- ⑬ スクリーン・プレー
- ⑭ 壁パス
- ⑮ 守備陣に脅威を与えるドリブル

2. 防御戦術

- (1) 総論部（1. チームプレーの基本，訳書 3—48 頁）
 - ① 守備の厚み
 - ② 攻撃を遅らせること
 - ③ 守備の集結
 - ④ 守備のバランス
 - ⑤ 守備における自制
- (2) システム論部（2. プレーのシステム，訳書 49—82 頁）
 - ① WM フォーメーション
 - ② 深いセンターフォワード
 - ③ 4-2-4 システム
 - ④ 1-4-1-4 システム
 - ⑤ 4-3-3 システム
 - ⑥ くさび型フォーメーション
 - ⑦ スライディング・ディフェンス（ボルト・システム）
- (3) 各論部（3. 新しい戦術の発展，訳書 83—134 頁）
 - ① 守備における戦術
 - ② なかば後退した守備
 - ③ 完全に後退した守備

以上のような構成で戦術論が述べられているわけであるが、今回の検討では、戦術として構造的にも機能的にもかなり特殊性を帯びてくる「システム論」の部分は対象からはずすこととする。

3.1. 攻撃戦術

非常に明らかなことであるが攻撃の最終目標はゴール（得点）であり、そのゴールへいかにして到達するか、どのようにすれば効率よく合理的に得点を挙げられるか、それが攻撃戦術を考える上での基本理念となる。

そして、ゴールを決めるためにはシュートが不可欠であり、そのシュートを打つためには「守備ラインの突破」がまず必要となる。

攻撃の開始はボールを自チームが保持した瞬間からであり、その瞬間から戦術の選択が始まるが、まず第一に考えるべき攻撃は速攻である¹⁾。

速 攻²⁾

理 由

・味方ゴールからいかに早くボールを相手ゴールに運ぶかが、攻撃戦術の第一原則である³⁾。

状 況

・ストライカーが相手ディフェンスの守っていないオープンスペースへ直接に走ってゆける状況

方 法

・ディフェンスの背後に落ちるパス（主にロング・パス）

条 件

・相手ディフェンダーよりも足の速い味方ストライカー

・相手がクローズ・マン・ツー・マンの守備の時

・相手が浅い守備隊形の時

そ の 他

・第二陣（ミッド・フィールダー）のバック・アップによって攻撃の効果は増大する。

そして、速攻が不可能な場合に初めて考えるのが相互パス攻撃である⁴⁾。

この相互パス攻撃も当然のことながら「守備ラインの突破」のために行われる訳であるが、ここで第一の目標となるのは「数的優位」⁵⁾の確立である⁶⁾。そして、その数的優位を利用することによってシュートへと結びつけるのである。

「数的優位」の確立のためにまず考えることは、攻撃の「厚み」・「幅広さ」・「活動性」・「臨機応変さ」である。

攻撃の「厚み」⁷⁾

方 法

- ・三人の選手によって作られる三角形の位置どりが基本となる。

目 的

- ・ボールを持っている選手に数多いパスの機会を与えると同時に、数多くの支援を可能にする。

注意すべき点

- ・三角形が平たくなればなるほどパスの可能性が減る。そして、三人が一線に近くなることによって横パスが増え、インターセプトの危険性が増大する。

攻撃の「幅広さ」⁸⁾

方 法

- ・フィールドの横幅に対し十分に広がってパスをまわす。

目 的

- ・中央の守備位置から守備者を引き出し、間隙を作り出す。

そ の 他

- ・ボールサイドで厚みを持たせることと、アザーサイドへの展開を同時に考えることも「幅広さ」に含まれる。

攻撃の「活動性」⁹⁾

必 要 性

・守備に比べ、攻撃はゴール前の限られた地域で正確さと注意力をより要求されるため、優位に立つためには相手を混乱させなければならない。

方 法

・連続的なポジションチェンジ、斜めへの走り込み、オーバーラッピング。

目 的

・相手守備者を混乱に陥れる。

攻撃の「臨機応変さ」¹⁰⁾

・事前に決めた戦術を厳格に守るだけでなく、場面に応じた融通性を持たせるようにする¹¹⁾。

これら四つ（「厚み」・「幅広さ」・「活動性」・「臨機応変さ」）は、チャナディの述べる「攻撃時のポジショニング」と関連して具体性を持ってくる。

ポジショニング¹²⁾

方 法

・ボールを持つ味方を楽にしてやれる位置で、同時に相手防御プレイヤーが困惑するような位置をとる。さらに、その位置をとるまでに動きに方向の変化をつけるとよい。

目 的

・相手防御プレイヤーの妨害、オープンスペースの開発、相手マークをはずす、相手防御プレイヤーに不安感を持たせる。

「厚み」や「幅広さ」の必要性を認識するとともに、「活動性」・「臨機応変さ」のなかでこのポジショニングの戦術を理解、実行することにより、攻撃

のためのより有利な条件を確保することが可能になるだろう。

さて、ここまでにおいて攻撃戦術の総論とでも言うべき箇所が検討されたわけであるが、つぎに攻撃活動全体の部分において使われるべき個別戦術に移る。

ウエイドによって示される個別戦術は15種になるが、それらを「パスに関するもの」、「ボールの保持に関するもの」、「活動性に関するもの」、「テクニックに関するもの」の4項目に分けて考える。

【パスに関するもの】¹³⁾

横パス¹⁴⁾

・相手守備者を引き出すのに効果的な方法となるが、これを使いすぎると重大な危険を招き、マイナスのプレーにもなりうる。

マイナスになる場合

- ・インターセプトされた場合の危険性
- ・スルーパスを出すことに対する消極性
- ・前方でパスを受けることに対する消極性から横パスを受ける結果となるとき。

壁パス¹⁵⁾

・瞬間的に2対1になったような場面での突破に使われる。

逆をつくパス¹⁶⁾

・一定方向へのボールの動きが急に逆になることと、それまでボールとプレーが全般的に動いていた方向から突然逆に展開するという両方の意味である。

・すばやく、頻繁に行うとよい。

目 的

- ・攻撃のためのスペースをつくるため
- ・相手の守備者の防御の感覚を狂わせるため

足もとへの正確なパス¹⁷⁾

- ・守備が密集した地域では、味方プレーヤーの足もとに正確にコントロールされたパスを送ることが重要となる。

【ボールの保持に関するもの】

ボールのキープ¹⁸⁾

- ・相手方にボールを保持させないようにすること。

組み立てのプレー¹⁹⁾

方 法

- ・ゴールを狙っていないかのように見えるパス

目 的

- ・相手をボールの方へ誘い出す。
- ・ボールを保持させないことにより心理的に不安な状態に陥れ、危険なプレーをおかさせる。

試合のペースを変える²⁰⁾

必 要 性

- ・同じペースであると守備側が対応に慣れ守りやすくなって来る。

方 法

- ・相手の守備を突き破るというはっきりした意図のない安全なパスであり、主にボールを相手ゴールのほうから後ろへ戻すパスによる。

目 的

- ・守備陣が集中をゆるめやすい。
- ・マイナスでパスを受けることによって、新たな突破の可能性がさぐれる。

【活動性に関するもの】

ボールへ寄る動き²¹⁾

- ・ボールを持っている選手の方へ寄っていくことにより、彼のパスの選択を単純にすると同時に相手の選手を引きつけることができる。

ボールから離れる動き（おとりの動き）²²⁾

方 法

- ・意識的にボールから離れるように動く。

目 的

- ・ボールを持っている選手から守備者を引き離すことによって、パスあるいはドリブルのコースをあける。
- ・守備者がこの動きについてこない場合でも、離れていった選手がフリーとなることができる。

斜めへの走り込み（ダイアゴナル・ラン）²³⁾

- ・フィールド縦軸上の動きにくらべ、守備者に数々の問題を与える。

守備者に与える問題

- ・後退する程度、マークする程度をどの位にするか。

目 的

- ・守備者を横へ動かしパスを出す間隙やオープンスペースを作る。
- ・守備者の後方のスペースが確保される。

ブラインドサイドのプレー²⁴⁾

- ・フォワードにとって、攻撃のプレーの主な目的の一つは、相手のブラインドサイド、特に守備者の後ろ側へはいり込むことである。

交差する動き²⁵⁾

- ・相手のブラインドサイドに位置を占めるためになされる斜めへの走り込みであり、2人またはそれ以上のプレーヤーによって行われる。
- ・タイミングよく交差して走り込むことによって、守備の組織を混乱させることができる。

オーバーラップの動きと後方からの走り込み²⁶⁾

- ・厳しくマークされた守備に対して、余った攻撃者をつくり出すためのすぐれた方法（程度の高い活動性が必要）
- ・守備側はボール保持者の後方の動きには、あまり注意をはらっていない

という理由により有効なプレーとなる。

【テクニックに関するもの】

スクリーン・プレー²⁷⁾

方 法

- ・身体を相手とボールのあいだに置いて遮蔽物として使う。

目 的

- ・密着マークに対してボールを保持できる。
- ・パス・プレーに関する意図をかくすことができる。

守備陣に脅威を与えるドリブル²⁸⁾

- ・高度に組織化された守備に対して、ドリブルで相手を抜きさる技術は非常に重要なものである²⁹⁾。

これらの個別戦術はあらゆるゲーム場面において、それぞれのチームや選手によって無数のバリエーションを持って採用されていくものである。

3・1・1. ま と め

以上において攻撃戦術の概ねが示されたわけであるが、攻撃戦術は技術的要素を含むものを除けば、時間一空間的問題と心理（精神）的問題の二つの観点から捉えられる。

スペース（空間）というものをいかにして作りだし、それをできる限り少ない時間のなかにおいて（ロスをなくして）ゴールへと導くか。そしてまた、時間的・空間的な余裕を作り出すために、どの様に相手を心理（精神）的に混乱させるか。このような二つの観点が攻撃戦術理解の為の重要な基本となってくるだろう。

また、技術的要素を含めて考えた場合には、作られた空間を確実に生かすためにパスとトラッピングの技術が、また時間的ロスを最小にするためにトラッピングの技術が、攻撃戦術を成功させるために非常に重要な技術的要素

となってくるだろう。

攻撃という活動全般に関しては、あらゆるゲーム場面において応変な戦術を選択するために「創造性」が重要であり、理想的には攻撃の戦術はシステムという隊形すらもとらないで「無形に至る」ことであろう。

3.2. 守備戦術

攻撃の目標がゴールであるならば守備の目標はそれを阻止することである。どのように相手の攻撃を最も合理的な形でゴールまで到達させないかが、守備戦術の基本理念であり、ボールを奪うことは二次的な問題となる。

守備戦術はウエイドの戦術論の骨子を見てもわかるように、攻撃戦術に比べてその内容がかなり少ないものになっている。この理由は、守備が攻撃のようにゴールという限られた目標へ向かっての活動ではなく、単に攻撃を止めさえすればよい活動であるということによる。

では、どのように攻撃を止めていくのかを順次考えていくことにする。

まず最初に守備の構造と機能を示すと、

構 造¹⁾

- ・守備の構造は三角形の組み合わせであり、より後ろにいくにしたがって、その構造はより緊密になる。

機 能²⁾

- ・攻撃側の選手がそこを通過して、またはそのなかで安全にプレーできるようなオープンスペースを制限する。
- ・パスの通せるような間隙を少なくする。
- ・選手はお互いをカバーし、同時にチーム全体としてスペースをカバーする。

この守備の構造と機能は守備の「厚み」として捉えられているものであるが、さらにどのような位置どりが必要であるかについての補足をすると、

- お互いのカバーが可能な位置
- 攻撃側の走り込もうとするオープンスペースをカバー可能な位置
- 一本のパスで同時に複数人間が置き去りにされない位置

このように守備における「厚み」は組織されなければならないのであるが、上述の条件をすべて満たすためには一定の時間的余裕が必要である。しかし、攻撃から守備に移る状況というのは攻撃のミスに端を発しているもので、かならずしも守備の「厚み」を作るために適した状態であるとは限らない。

そこで重要になってくるのが「攻撃を遅らせること」である。

攻撃を遅らせること³⁾

- 相手の攻撃の前方に後退する。

具体的方法

最前線——そばにいる相手選手の邪魔をし、前方へのパスのコースをおさえる。

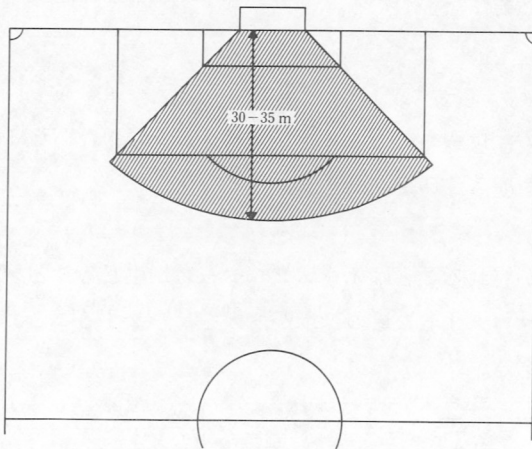
中 盤——相手の中盤の選手をびったりとマークする。

最後尾——相手がねらっていると思われるスルーパスに対処して、カバーできる位置をとる。

このように攻撃を遅らせることによって守備を組織しつつ後退をしてゆくと、これ以上は戦術的に下がることのできない最終的な守備のエリアへ到達する。それは図1によって示される地域である。

何故この地域が最終的な守備のエリアであるかの理由は二つある⁴⁾。一つはゴールの前面においては有効なシュート(20—25 m)の範囲外となること。もう一つはこのエリア内に守備者が集まれば、角度が制限されることにより得点に結びつくシュートの可能性がほとんどなくなることである。

図 1



という訳で、若干前後することになるが、最終的にこの地域に守備を集結させることになる。

守備の集結⁵⁾

- ・シュートを打てる場面を可能性の少ないところへ合理的に限定する。
- ・守備者同志のあいだにあるスペースを狭くすることにより、攻撃側のスルーパスの可能性を減らし、且つ攻撃側のプレーに時間的余裕を与えないようにする。

ボールを失って守備に転じてから最終的な守備のエリアへの集結までが以上で検討されたわけであるが、最終的な守備のエリアまで後退し集結できたということは、ボールを奪うという積極的な要素を抜きに考えれば、守備の戦術が成功したことを示すだろう。しかし、実際にはそこへ至るまでに、攻撃陣はその活動性であらゆる突破の試みをして守備の組織を崩そうとするのである。

そこで、それに対応するために「守備のバランス」と「守備における自制」の二つが必要になってくる。

守備のバランス⁶⁾

- ・相手チームに攻撃のための有効なスペースを与えないために、できる限り守備隊形を崩さないようにする。

理 由

- ・守備隊形が崩れることはオープンスペースが生じることを意味するが、スペースをマークすることのほうが、人をマークすることよりもはるかに重要なのである。

注意する点

- ・厳重なマン・ツー・マン・マークを行うと守備のバランスは崩れ易くなる。

守備における自制⁷⁾

・「厚み」をつくること、攻撃を遅らせること、バランスを保つことなどを行うときに必要になるものである。つまり、ボールにつられて動いてしまったり、可能性の少ない無謀なタックルを挑んだりして、上記の目的を忘れないようにすること。

- ・プレーが、ペナルティエリアに近づけば近づくほど、危険地域であるので守備側プレーヤーの自製の度合いがより大きくなる。

- ・相手がボールを持っているときに何が危険であり、何が有利であるかをよく知っていること。

以上のようにして、攻撃はその活動を制限されそして阻止されていくのである。

3・2・1. ま と め

守備は受け身であり、その活動のすべては相手の攻撃に対応するものである。攻撃がスペース（空間）を作りだそうとするのに対し、可能な限りそれを制限し、出来るだけ早くゴールへ辿りつこうとするのに対し、それを遅らせる。そして、相手が様々な攻撃戦術をもって混乱に導こうとするのに対し、冷静な判断と反応によって対処する。また守備はボールなしの状態での活動なので、攻撃ほど技術的要素は重要な役割を果たさないが、それに代わって判断力がその重要性を帯びてくる。

守備の活動全般に関しては、「安全性」が最優先される。そして、守備の組織には攻撃に対応する中で一定の構造を崩さないための「確実性」が必要となる⁸⁾。

4. おわりに

本研究は、サッカーの技術・戦術に対する基本的な検討を目的として行われた。検討に当たってはできる限り著者の本意を探るように努力して解釈したつもりであるが、冒頭にも述べたように日本国内では環境的にサッカーの技術・戦術の本質にじかに触れる機会が著しく少ないため、どこまで正鵠を得た検討であるか、ということが本研究の限界となる。しかしながら、この小稿は国内のあらゆる指導者に批判される対象となることによって、技術・戦術へのより深い理解への一つの足掛かりになるはずである。

なお、今後はさらに幅広く戦術論を検討していくとともに、

- ① 攻撃戦術、守備戦術を別々のものではなく連続したものとして捉えられるような総合戦術の検討、考案
- ② 知識体系として存在する戦術を、チームやゲームに実際に適用し運用する時に問題となる実戦的な智の検討

以上を課題としていきたい。

〔註〕

1

- 1) 西独サッカー協会主任コーチ，国際サッカー連盟専任コーチ。1960年，東京五輪代表（ベスト8）強化のため初来日，メキシコ五輪代表（銅メダル）も指導。
- 2) 「そこが聞きたい」『読売新聞』1989年5月20付。
- 3) 松本光弘「サッカーの指導過程に関する試案」『筑波大学体育科学系紀要』247—260頁，1989年。
- 4) Stratton Smith & Eric Batty, “INTERNATIONAL COACHING BOOK”, 1966, 成田十次郎訳『サッカー上達の秘訣』1—3頁，ベースボール・マガジン社，1972年。
- 5) トップ・レベルのゲームを観戦することは，技術・戦術の洞察のための重要な材料である。
- 6) 浅見俊雄編，スポーツの科学的研究レビューシリーズ1『サッカー』新体育社，1981年。

2

- 1) 本稿において「技術」とは，主体に内在したものである技能（スキル）の意味で使われる。
- 2) Arpad Csanadi, “LABDARUGAS I-III” (Revised English 1978 Edition), 宮川毅訳『新版 チャナディのサッカー』238—239頁，ベースボール・マガジン社，1984年。
- 3) 同上訳書，239頁。
- 4) Allen Wade, “THE FA GUIDE TO TRAINING AND COACHING”, 1967, 浅見俊雄訳『イングランド・サッカー教程』7頁，ベースボール・マガジン社，1974年。
- 5) 同上訳書，234—235頁。
- 6) 同上，237頁。
- 7) 同上，237頁，および，ウエイド，前掲訳書，5—7頁。
- 8) チャナディ，前掲訳書，225頁。
- 9) 同上，226頁。
- 10) このような誤解はウエイドの言葉を借りるなら「クラブや選手や観衆の側に基本的な理論に対する理解が不足していることを意味している。」のである。

3・1

- 1) チャナディ，前掲訳書，387—388頁。
- 2) 同上，382—385頁。
- 3) 同上，310頁。

- 4) 同上, 385 頁。
- 5) ウェイドは数的優位を、「2対1の状況を作りだし、それを利用すること」と捉えている。
- 6) チャナディ, 前掲訳書, 386 頁, および, ウェイド, 前掲訳書, 44 頁, 94 頁。
- 7) ウェイド, 前掲訳書, 8—12 頁。
- 8) 同上, 24—29 頁。
- 9) 同上, 29—32 頁。
- 10) 同上, 44—48 頁。
- 11) チャナディの言う応用戦術に相当するものである。
- 12) チャナディ, 前掲訳書, 318—322 頁。
- 13) パスの戦術に関してチャナディは受手への配慮（処理しやすいボール）とパスの偽装（意図を隠す, 相手の逆をつく）を強調している。
- 14) ウェイド, 前掲訳書, 100—102 頁。
- 15) 同上, 123—125 頁。
- 16) 同上, 112—114 頁。
- 17) 同上, 120—122 頁。
- 18) 同上, 99 頁。
- 19) 同上, 97—98 頁。
- 20) 同上, 114—120 頁。
- 21) 同上, 96—97 頁。
- 22) 同上, 104—106 頁。
- 23) 同上, 102—104 頁, および Charles Hughes, “SOCCER TACTICS AND SKILLS”, 1980, 鈴木泰子訳『サッカーの技術と戦術』85—97 頁, 日刊スポーツ出版社, 1984 年。
- 24) ウェイド, 前掲訳書, 106 頁。
- 25) 同上, 107—109 頁。
- 26) 同上, 109—112 頁。
- 27) 同上, 122—123 頁。
- 28) 同上, 126—130 頁。
- 29) ドリブルに関してチャナディは, それがパスに比べて時間がかかるという理由で突破の攻撃戦術としてはその有効性をあまり認めていない。

3・2

- 1) ウェイド, 前掲訳書, 12 頁。
- 2) 同上, 12 頁。
- 3) 同上, 17—20 頁。

- 4) 同上, 21 頁。
- 5) 同上, 22—24 頁。
- 6) 同上, 32—39 頁。
- 7) 同上, 39—44 頁。
- 8) 「安全性」・「確実性」の重要さは、守備戦術では、味方が相手プレーヤーに抜かれてしまった後の対応の仕方にまで言及していることよりもわかる（ウエイドのシステム論内——⑦ スライディング・ディフェンス）。